

コロナ対応外出自粛中に学ぶ②

高杉晋作の生涯

●吉田松陰の遺書「留魂録：りゅうこんろく」の教え

「天下の事を成すは天下有志の士と志を通じるに非ざれば得ず」

※吉田松陰は、江戸伝馬町の獄で処刑される前、遺書「留魂録」を2通残している。

なぜ、2通であったのか。1通であったら、紛失の場合が考えられる。

もう1通あることによって、その危険を避けることができる。その不安は、現実であり、萩に帰った1通は、その後、萩で紛失し無くなってしまった。もう1通は、伝馬町の獄で、沼崎吉五郎という牢名主に預けられた。

この1通は、沼崎吉五郎が三宅島に島流しされたときも大切に保存され、刑期が終わって東京へ持ち帰ったのち、無事、萩に届けられ、現在、松陰神社の博物館：至誠館の留魂間に展示されている。

■高杉晋作、奇兵隊を創設して活躍■

●高杉晋作：上海を見る

高杉晋作（1839～1867年）は、萩で生誕・下関で没する：墓は下関市吉田

文久2年（1862）5月～7月にかけて上海へ渡航し、（アメリカ・フランスに租借された、みじめな清国＜現在の中国＞の様子を視察）（外国の近代化された軍備を見て驚き、ピストル2挺、ハンドバッグなどを、おみやげに買う）

※このとき、外国の軍隊に立ち向かっても勝てないことを悟った。そして、洋式軍備を整えなければならないことを痛感した。

帰国後、即刻、上司に幕府を倒すことを進言したが、その考えは10年、早いと聞いてもらえなかった、そこで、「では、藩士をやめ僧になる」といって剃髪し、「東行」と称した。これに先立ち、

西へ行く人を慕いて東行く

わが心をば神ぞ知るらん という句をつくった。

「西へ行く人」は、西行法師のことで、「東行く」は、江戸幕府を倒すために、東へ行く、との心のあらわれであった。

以来、号を「東行とうぎょう」と称した。のちに「東行墓：東行庵」などと使われている。

●関門海峡を行く外国船を撃つ

幕府は、文久3年（1863）5月10日をもって、攘夷決行とした。

第一次攘夷戦で、アメリカ商船ペンブローック号を攻撃。（5月10日）

第二次攘夷戦で、フランス報知艦キャンシャン号を攻撃。（5月23日）

第三次攘夷戦で、オランダ軍艦メジュサ号を攻撃。（5月26日）

第四次攘夷戦で、アメリカ軍艦ワイオミング号を攻撃。逆に敗れる。（6月1日）

第五次攘夷戦で、フランス軍艦セミラミス・タンクレード号を攻撃。逆に上陸され

前田砲台を占領される。(6月5日)

●高杉晋作・下関へ登場「奇兵隊」を創設

高杉晋作は、藩主から関門海峡の争乱を鎮めるよう命じられ、下関市竹崎町の白石正一郎宅に来る。文久3年(1863)年6月6日のことであった。

白石正一郎宅で「奇兵隊」結成。(6月7日)。正一郎日記では(6月8日)

※“有志の士、集まれ”(これまでの軍隊は、武士によって編成されていたが、奇兵隊は、「志」のある者ならば、士農工商に関係なく、入隊することができた。これは、それまでの身分社会を崩壊させるもので、大きな意味をもつものであった。人はみんな平等である。という考え方が、形になって現れたもので、高杉晋作の大きな功績である。

その精神は、吉田松陰の遺書「留魂録」の13項に記述されている

「天下の事を成すは天下有志の士と志を通じるに非ざれば得ず」からである。

●四国連合艦隊来襲、敗北で「攘夷から討幕へ」転換

元治1年(1864)年8月5日。四か国(イギリス・アメリカ・フランス・オランダ)の連合艦隊来襲。下関市前田に上陸して占領し、大敗北となった。

(イギリス=9隻、オランダ=4隻、フランス=3隻、アメリカ=1隻 合計17隻)

※高杉晋作は、講和全権大使として交渉にあたり、和議成立。彦島の租借を拒否し、300万ドルの賠償金(遠征の全経費プラス下関の街を焼かなかつた償金)を幕府に払わせることにする。

300万ドルの分配=フランス・オランダ・アメリカ=785,000ドル

イギリス=645,000ドル(140,000ドル少ない:前年、関門海峡へ襲撃なし)

※慶應1年(1865)支払いを開始し、明治7年終了。

※アメリカは、明治16年、全額を日本へ返還した。

※彦島を、租借から拒否した意味は大きく、租借を許していたら、香港のようになっていたと思われる)

●藩論を”倒幕へ統一”するため、下関市長府功山寺で挙兵

高杉晋作は、元治1年(1864)12月15日 “回天回運の策”をたて、俗論派討伐のため長府功山寺で挙兵。わずかに伊藤博文など80人ほどが従って出発した。

※このとき、高杉晋作は、死を覚悟しての挙兵であったが、国のためであれば、父や母、子を捨てることになっても、なんら悲しいことではない、と詩“焦心録に題す”を詠んでいる。

※大田絵堂(現在美祢市)の戦いが、慶應1年(1865)1月6日に始まり、俗論派を破って、長州藩が、倒幕へと意志を統一させた。

(それまで、長州藩には、急進派と保守派があった。急進派が勝利して藩論を統一)

●日本最初の招魂社創建

慶應1年(1865)8月6日、高杉晋作の発案で、日本で最初の招魂場:桜山招魂場を創設。その後、全国各地に招魂場ができ、東京招魂場は現在の靖国神社である。

弔むらわる人に入るべき身なりしに、弔むらう人となるぞはづかし」

※高杉晋作の呼びかけによって、奇兵隊に入隊してきた人が、自分よりも先に亡くなったことに対して心を痛め、弔った。

●四境戦争（幕長戦争）に勝利す

第二次幕長戦争が始まると、大島口では、慶応2年（1866）年6月7日、高杉晋作、がオテント丸（丙寅丸）で出撃し、勝利する。

※小倉口（北九州市）では、6月17日に戦いが始まった。（坂本竜馬も高杉晋作を支援した：7月27日に赤坂で激戦。8月1日、幕府軍総指揮小笠原長行逃走（徳川家茂死去）、小倉城は自焼し、長州藩が勝利した。

※小倉藩約20,000人に対し、奇兵隊など約1,000人で勝利した。その勝因は、長州藩が、早くから洋式軍備を整えていた。それは、高杉晋作が上海へ渡航した時に、西洋の軍備を早く備えなければ、と痛感していたからである。このとき、坂本龍馬の尽力で、薩摩藩の名義で、武器を購入などしていた。

※この戦いするとき、小倉藩の藩校（思永館）から、書籍を持ち帰り、奇兵隊の所蔵本として学んでいた。

※他の戦利品は、小倉城の大太鼓が巖島神社（下関市新地町）、延命寺の灯籠などが、東行庵に設置されている。

●西洋の軍備を購入する経済力は

長州藩の経済力は（撫育方・越荷方役所が万一に備え、お金を蓄えていた）

下関港は北前船（東北から大坂港）の中継港で、出入りする船の荷物を預かって保管料を得たり、担保にして金を貸す。委託販売を行ったりなどで、金融業を行い収益をあげていた。その収益は、万一に備えて蓄えられ、幕末になって洋式軍備の資金にあてられた。



（高杉晋作挙兵の銅像：長府功山寺）

■名残のひととき■

●高杉晋作、名残のひととき

慶応3年（1867）4月14日、高杉晋作は、下関で病死した。

“大不幸中の一幸”（親より先に死ぬのは、大きな不孝であるが、長男を残したのが、唯一の孝行、という意味）

“面白きこともなき世を面白く 住みなすものは心なりけり”

NHKの「そのとき歴史が動いた」の番組で、もう一度聞きたい歴史上の人物の名言で、第1位あった。

※日本三大銘菓「越乃雪」で、名残の雪見をする。

高杉晋作は、病が重くなったとき、日本三大銘菓の「越乃雪」を、松の盆栽にかけ、名残の雪見をした。（三浦梧郎が見舞いに行ったときに、話した）

●高杉晋作の教養

※手紙に見る、高杉晋作の人柄

母や夫人などへあてた手紙から、細やかな心をもっていた人であったことが、偲ばれる。愛人おうのへの手紙には、優しさ、愛を感じる。

※漢詩に見る、高杉晋作の教養

わずかに27歳と8か月という若さで亡くなったが、300篇にも及ぶ漢詩を詠み、現代人が対抗することのできない教養人・知識人であった。だからこそ、藩が重用し、親の年齢ほど離れた、白石正一郎が私財を投げうって支援したのである。

■高杉晋作の法灯を守る■

●墓標には「東行墓」と刻まれている。

慶應3年（1867）4月14日、高杉晋作は、27歳8か月の生涯を閉じた。

葬儀は、16日、数千人が会葬し、吉田で神式により執り行われた。それは、白石正一郎などが一切を取り計ったことによる。墓は遺言により、吉田清水山に祭られ、高杉晋作の号から「東行墓」とのみ刻まれている。（本人が記した墓誌銘は、葬儀ののちに判明したことによる）

●愛人おうのは「梅処」と称す

おうのが、いつから梅処と称したかについては、高杉晋作の祥月命日の5月14日、吉田の庄屋末富虎次郎が記した日記に、

「五月十四日雨、今日は東行君初命日に付、半七郎様（東行の父） 御留にて神式有之、時山様、梅処女（おうの）も七つ時（午後四時）着成候」

とあり、すぐに「梅処」と称したことがわかる。

この「梅処」は、高杉晋作がこよなく梅を愛していたことから、自ら作っておうのに贈った茶杓の銘に、すでに「梅處」と記してあった。ここから、おうのが名乗ったものと、推察することができる。